

平成 28 年 5 月 5 日

横浜国立大学大学院教授 大野 敏

はじめに

町田市鶴間に所在する日枝神社本殿は、1 間社流造・こけら葺きの建築である。建築年代は、身舎内の墨書により享保十一年(1726)と判明し、造営に鎌倉乱橋村の大工・蔵並七郎兵衛、愛甲郡飯原村(半原村)の木挽・小嶋佐五右衛門、武蔵国多摩郡鶴間村の屋根葺・西本市兵衛が関与したことを伝える。本殿の建築はすでに『町田の近世建築』(執筆:関口欣也・吉田純一ほか、昭和 51 年 3 月、町田市史編纂室)において取り上げられており、享保 11 年(1726)10 月の棟札写し^{注1}により鎌倉大工蔵並家が関与することや、鶴間地区内の熊野神社本殿を移した所伝が知られていた。

筆者は平成 27 年 12 月 2 日にこの本殿を実際に調査する機会を得た。その知見を基に、以下に本殿の建築的特徴と建築史的価値について記してみたい。

鶴間村の日枝神社と熊野神社について

『新編武蔵風土記稿』(以下風土記稿と呼ぶ)によると、多摩郡鶴間村の鎮守は熊野神社(百姓持)で、ほかに百姓持として山王二社の存在を記す。この山王二社のうちのいずれかが当日枝神社と思われるが、風土記稿はいずれも「小社」と記すのみで詳細は不明である。

一方、所伝によると現日枝神社本殿は熊野神社本殿を移したものであり、風土記稿によると熊野神社は「内殿三尺四方 覆屋二間半四方」と記す。現在の本殿は、流造の身舎規模において桁行 3.33 尺・梁行 2.93 尺で、本殿内墨書により大工は鎌倉乱橋の蔵並七郎兵衛であることが確認でき、現本殿の保存状態から見て建築当初から覆屋内で保護されてきたと考えられる。また、『町田の近世建築』は、風土記稿をもとに市内神社建築の分析を行い、覆屋付の本殿は村社クラスに限定される傾向を指摘する。したがって、風土記稿が「小社」としか記さない当時の日枝神社本殿が現本殿に相当する可能性は低く、規模・棟札写しと墨書における造営大工の一致、覆屋の存在等から判断して、現本殿は旧鶴間村の村社・熊野神社本殿とする所伝を認めてよいであろう。

本殿の墨書と造営関係者

本殿の身舎正面の扉周囲、すなわち内法上の小壁内面と、扉両脇の小脇板壁内面に、以下のような墨書銘が確認できる。

まぐさ板内面墨書(写真 3 参照)

「享保十一丙年／午四月／相州小坂郡鎌倉／乱橋村／大工／蔵並七郎兵衛／善介／八二郎
／同州愛甲郡飯原村／木挽／小嶋佐五右衛門／武州多摩郡鶴間村／屋根葺／西本市兵衛」
正面向かって左側の小脇板内面墨書

「享保十一年丙午四月／相州小坂郡鎌倉乱橋村／大工蔵並七(以下小脇板端見え隠れ)」

正面向かって右側の小脇板内面墨書 (写真4～5参照)

「相州愛甲郡飯原村／木挽小嶋佐五右衛門／年四拾■(以下小脇板端見え隠れ)」

いずれの墨書も同筆で、小壁板には大工名3名・木挽1名・屋根葺1名を記し、小脇板にはそれぞれ大工1名、木挽1名を記す。

小脇板の墨書は、下端が床造作の見え隠れになる状態で記すことから、床造作以前に記したことが明らかで、大工蔵並(七まで読めるので七郎兵衛と考えられる)と木挽小嶋佐五右衛門を併記するので、この2名が工事の主要人物と考えられる。なお、木挽の在所が飯原村とあるのは半原村の事であろう。

一方、小壁板墨書は、大工蔵並七郎兵衛・木挽小嶋佐五右衛門のほかに、蔵並七郎兵衛配下の職人2名と鶴間村所在の屋根葺職人・西本市兵衛の名前を記す。現状のこけら葺き屋根は1重軒付の古式を示し、享保の施工と考えて問題ないので、本殿建築当時は地元鶴間村にこけら葺き職人が存在したことになる。

そして、墨書の年月が享保11年4月であることは、先述の棟札写しが享保11年10月で成就事と記すことを考えると、享保11年4月段階はこけら葺きや造作工事が進捗中で、10月23日に竣工を迎えたということであろう。なお、棟札写によると願主は井上善四郎で、惣氏子の協力により成就したことを伝える。

本殿の建築

本殿の建築概要は、1間社流造・こけら葺きで、東面して建ち、覆屋で保護されている。本殿柱間規模は身舎桁行3.33尺(1000mm)、同梁行2.93尺(888mm)、庇梁行2.51尺(761mm)である。建築各部は以下の通りである。

〔基礎〕 覆屋の土間コンクリート上に、本殿の木製土台を直接配置しているように見える。

ただし、本殿の礎石を残したまま、覆屋の土間コンクリートを礎石上端くらいまで打設していると思われる。

〔軸部〕 身舎柱・庇柱・縁束位置にそれぞれ土台を廻して土台建てする。

身舎柱は見え隠れ(縁長押以下)を8角仕上げとした円柱で、身舎柱間は土台・腰貫・縁長押・内法貫・内法長押・頭貫で繋ぎ、頭貫に木鼻を有する。頭貫鼻は、正面・背面とも桁行を象鼻形式とし、背面梁行をトリカブト形式とする(正面梁行は海老虹梁尻がおさまるので木鼻はない)。

庇柱は大面取の角柱で、柱間を足固と虹梁状の頭貫で繋ぎ、頭貫には木鼻を設ける。また、身舎柱と庇柱は柱頂を海老虹梁で繋ぎ、庇柱頂の海老虹梁先端に木鼻を付す。庇柱頂の木鼻は丸彫で、桁行は猿鼻、梁行は唐獅子とする。

縁束は角材で、縁束同士を足固貫と縁葛(頭貫状の部材)でつなぐほか、身舎背面柱と縁束も足固貫と縁葛で繋ぐ。

〔組物〕 身舎柱上の組物は、絵様実肘木付の連三斗とし、中備は実肘木付の墓股とする。

そして桁行方向の組物・中備にて軒桁を支承し、梁行方向の組物・中備にて妻組虹梁を支承する。庇柱上組物も絵様実肘木付の連三斗とするが、ここでは梁行後方組物上に手挟を支承する。また、庇柱間の中備は実肘木付の臺股とし、組物・中備により庇軒桁を支承する。

〔妻組〕梁行方向の身舎組物間に虹梁大瓶束の架構を組む。大瓶束は両脇に大振りな笈形を付し、束上の組物は壁付を花肘木とした三斗枳肘木で、桁行組物は絵様実肘木上に棟木を受ける。

〔軒〕正面軒は、棟木～身舎正面軒桁～庇軒桁に地垂木を架し木負を取り付け、その上に飛えん垂木を重ねて2軒繁垂木を構成する。飛えん垂木上に茅負・裏甲(布裏甲)を重ねる。地軒・飛えん軒とも化粧裏板張りとする。

背面軒は、棟木～身舎背面軒桁に地垂木を架し木負を取り付け、その上に飛えん垂木を重ねて2軒繁垂木を構成する。茅負・裏甲・化粧裏板の扱いは正面と同じである。

垂木割は、正背面とも桁行柱間(実測値 3.33 尺)18 枝で、1 枝寸法は 0.185 尺である。けらばの出は、破風板位置まで 9.5 枝である。

〔妻飾り〕破風板は欠眉(表面に施したしゃくり)を設け、破風板下に懸魚を付す。拌み懸魚は両脇に鰭を付し、懸魚中央上方に菊座付の六葉飾りを樽口(木栓の一形式)で止める。

降り懸魚は鰭を付さず、中央上方に六葉飾りを花卉形の木栓で止める。なお、拌み懸魚・降り懸魚の形状は、猪目懸魚・かぶら懸魚と呼ばれる形式の懸魚と同じ輪郭であるが、猪目・かぶらの特徴となる装飾がないため形式を特定できない。また、破風板の庇軒桁位置に兎の毛通し(懸魚の一形式。扁平な形状を有する)。

〔柱間装置〕身舎正面は幣軸構えの両外開板扉を設け、身舎側面と背面は板壁とする。すなわち、身舎正面は、縁長押上の半長押と内法長押下の半長押間に小壁板を立て、幣軸を組み、幣軸・上半長押裏面に戸当たりの「まぐさ板」を取り付け、板扉を釣り込む。板扉は上下に端嵌を付し、召し合せに定規縁を備え、落とし錠を設ける。壁板は、縁長押～内法長押間に横板壁を嵌め込み、上下端を半長押で見切る。壁板は、側背面の腰長押～土台間に横板嵌めとする。

〔床・天井造作〕屋内から見ると、身舎半長押上端高よりも4分(12mm)下に横板を取り付け床とし、扉口から1.1尺奥方に祭壇を設ける。ただし、床下を見ると腰貫上端高において梁行方向に4枚張りの床板が見えるので、これが本来の床板である可能性があるが、屋内から確認できないので、現時点では本来の床形式は不明としておきたい。

天井は、頭貫上端高さ揃えに鏡天井を張る。

〔木階・縁造作〕木階は5級木階で、登り高欄を設ける。また、縁は身舎正側面に設け、正面隅は隅叉首を備えて跳高欄を設け、側面後端は脇障子で見切る。また、登り高欄と跳高欄の交差部には擬宝珠柱を立てる。縁板は正側面とも檜の一枚板を使用する。

〔屋根〕屋根はこけら葺きで、軒付は蛇腹板を下地とした一重軒付である。大棟は品軒を積んだ上に箱棟を設け、両端に鰭付の鬼板を配し、棟頂に樋棟を通す。箱棟・鰭付鬼板・

樋棟ともに木製で、鬼板見付には笹竹紋、箱棟胴部中央は宝輪と剣、胴部両脇に笹竹紋の飾り板を付す。

〔材種と塗装〕使用木材の材種は、軸部・組物・造作・妻組・妻飾りなど全体的に檜材を豊富に用い、縁板や脇障子板は幅広の一枚板を贅沢に使用する。一方、檜材以外の木材は、腰下と内法の横板壁や軒廻りの垂木・化粧裏板・裏甲および天井板に杉材使用が認められる。また、現在の身舎屋内見えかかりの床板と祭壇は檜材のようであるが、床下には杉材の床板が確認できるので、床板も本来は杉材が本来らしい。したがって、使用木材は、檜を主体に部分的（壁板・天井板・床板・垂木・化粧裏板・裏甲）に杉材を併用していることになる。

塗装彩色については、檜材は基本的に見え掛かりを拭き漆仕上げとし、杉材は垂木を拭き漆・裏甲を墨塗りするほかは素木とする。また、身舎正側面の墓股の脚内彫刻は彩色をしていた。庇の墓股と木鼻彫刻にも彩色していた可能性があるが、現状は風化で判然としない。なお、大棟の箱棟・鬼板・樋棟は墨塗りしているようである（材種は杉の様だが目前で確認していないので不明）。

〔飾り金具〕板扉・長押・破風板に金具取付痕が認められ、長押隅金具は一部中古材が取りついている。おそらく金具取付面に拭き漆が鮮やかに残ることから、旧金具は戦時中に供出され、戦後に一部を補ったのであろう。痕跡から判明する扉の飾り金具は、扉4隅と召し合せ中央部、扉錠口周囲、および定規縁にそれぞれ八双型金具が存在した。また、長押隅に出八双型金具、破風板拝みと尻に入八双金具、同降り懸魚位置の破風板に卍金具、同じく兎の毛通し上方の破風板に宝輪と剣紋の金具、を取り付けていた。なお、現在の長押隅金具と身舎正面長押中央の巴紋金具は後補である。

〔柱間寸法計画〕身舎桁行柱間寸法 3.33 尺(Lとする)は、1 枝寸法 0.185 尺に相当する。身舎梁行柱間寸法 2.93 尺は 0.88L に相当し、庇梁行柱間 2.51 尺は 0.75L に相当する。身舎柱径 0.35 尺は 0.105L、庇柱巾 0.31 は 0.093L(身舎柱径の 0.88 倍)に相当する。

縁束の出 1.25 尺は 0.375L (庇梁行柱間の 1/2) に相当する。また、縁長押上端～頭貫上端までの高さ 2.75 尺ほどで、ほぼ身舎梁行柱間に相当する。

建築の特徴と大工

上記の通り、日枝神社本殿（旧熊野神社本殿）は、身舎規模が 3 間四方位程度の小社の流造社殿建築であるが、背面まで精緻に作り、全体的に檜材をふんだんに使って拭き漆で仕上げ、飾り金具(現在欠失している)も多用していた。また、こけら葺き屋根も大棟を含めて丁寧に施工され、一軒軒付を含めて享保期のこけら葺き技法を留めるものとして注目される。さらに、棟札写しと墨書銘により造営時期と願主・工匠銘が判明し、とくに大工として鎌倉蔵並家が関与したことが判明する点は重要である。

蔵並家は、慶長 9 年(1604)鶴岡八幡宮棟札が伝える「惣引棟大工蔵並太郎左右衛門尉豊吉」(引棟は引頭の意味で、大工筆頭の岡崎家に次いで高い地位にあった)を初出とし、現存

遺構として光明寺本堂(元禄 2 年 1698・重要文化財・鎌倉市材木座)や光則寺本堂(寛政 2 年 1800・鎌倉市長谷)などを手掛けた鎌倉の有力大工家である(『神奈川県近世社寺建築調査報告書』平成 5 年 神奈川県教育委員会)。

一方、『町田の近世建築』記載の棟札(現存しない建物も含む)において大工名が判明する事例 51 件の大工居住地に注目すると、地元や近隣が 25 件、所在地不明 16 件、常洲 3 件(吉川家)、津久井郡 2 件、武州吉見領 2 件(須永家)、相州大住郡(明王太郎)1 件、鎌倉蔵並家 1 件、江戸神田 1 件である。すなわち当本殿は、有力な鎌倉大工作品として、町田市における唯一の確認事例としても貴重である。また、鎌倉大工に造営を依頼できたということは、当時の鶴間村の状況をうかがい知るうえでも注目される。

おわりに

以上、日枝神社本殿は鶴間村の村社であった熊野神社本殿を移した遺構で、墨書と棟札写しにより造営経緯(享保 11 年 4 月に建築が進捗中で同年 10 月に竣工)や造営関係者が判明する。建築は比較的小規模ながら、享保 11 年創建時の部材と形式をよく留め、木部は檜材をふんだんに用い拭き漆仕上げする部分が多いこと、細部まで丁寧に作られていること、町田の近世建築で鎌倉大工(蔵並家)の関与が判明する唯一事例であること、屋根は地元の職人がかかわったこけら葺きが当初形式を留めていること、などにおいて大変貴重である。

なお、基礎のおさまりが悪いため、土台をはじめ軸部下方の傷みが顕在化している点が気になるので、文化財としての価値を踏まえたうえで早急の対応が望まれる。

注 1

『町田の近世建築』が紹介する熊野神社(現日枝神社本殿棟札)〔井上敬三家文書〕

〔表〕武州多摩郡小山田領鶴間村／奉再興熊野大権現一字成就所／願主／井上善四郎

〔裏〕惣氏子／享保拾一丙午年十月廿三日／御大工／相州鎌倉乱橋町蔵並七郎兵衛藤原
党竹



1. 日枝神社本殿 覆屋全景



2. 日枝神社本殿正面全景

本殿は 1 間社流造・こけら葺きの建築である。建築年代は身舎内の墨書により享保十一年 (1726) に鎌倉乱橋村の大工・蔵並七兵衛、愛甲郡飯原村 (半原村) の木挽・小嶋佐五右衛門、武蔵国多摩郡鶴間村の屋根葺・西本市兵衛により造営されたことが判明する。



3. 日枝神社本殿墨書(身舎正面まぐさ板内面 モヤショウメンマクサイタウチメン)

享保十一年 丙午四月	相州小坂郡鎌倉 乱橋村 大工 蔵並七郎兵衛 善介 八二郎	同州愛甲郡飯原村（半） 木挽 小嶋佐五右衛門	武州多摩郡鶴間村 屋祢茸 西本市兵衛
---------------	---	------------------------------	--------------------------



相州愛甲郡飯原村
木挽小嶋佐五右衛門
年四拾（以下小脇板端見え隠れ）



享保十一年
丙午四月
相州小坂郡鎌倉乱橋村
大工蔵並七（以下小脇板端見え隠れ）

4 および 5. 日枝神社本殿墨書(身舎正面小脇板内面 コキイタ)



6. 日枝神社本殿 庇木階(ヒサモカイ)と登り高欄(ノボリコウラン)
高欄の擬宝珠(ギボシ)は宝珠が欠失している。



7. 日枝神社本殿 縁高欄
高欄は跳高欄(ハネコウラン)形式で一部破損が認められる。



8. 日枝神社本殿 庇架構

庇柱間は水引虹梁(ミズヒコリョウ)で繋ぎ、猿形の木鼻を付す。庇柱上は、連三斗(ツレミツト)形式の枳肘木を組んで絵様実肘木(エヨサネジキ)を重ね、桁行は軒桁・梁行は手挟(テササ)を支承する。水引虹梁上の中備は絵様実肘木付の臺股を配する。庇柱頂と身舎柱頂は海老虹梁で繋ぎ、唐獅子形の木鼻を付す。

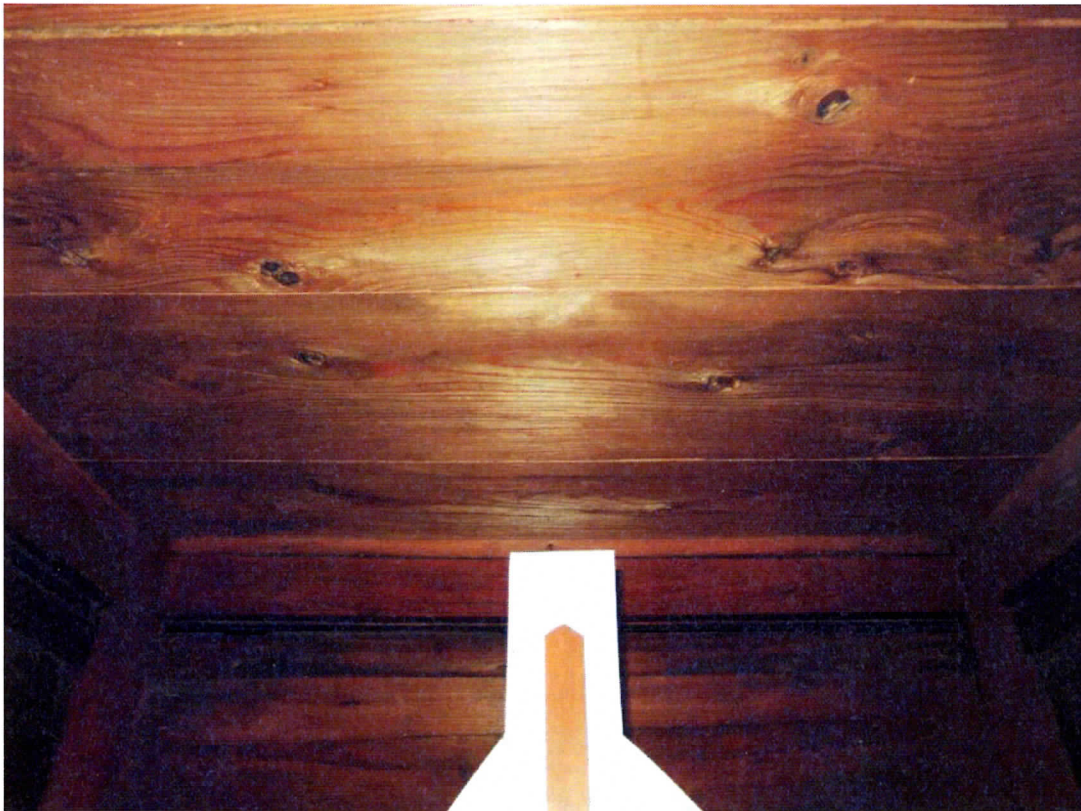


9. 日枝神社本殿 庇柱上部詳細 ※連三斗とは木鼻上に斗を置き、桁行斗を4個配置する形式。



10. 日枝神社本殿 身舎正面 扉を開いた状態

身舎内の床は後半部を一段高く構えて祭壇化している。扉内面は拭き漆されているようである。



11. 日枝神社本殿 身舎天井

天井は、頭貫上端高さに鏡天井を設ける。柱・頭貫などの檼材は拭き漆仕上げされているようである。



1 2. 日枝神社本殿 身舎正面木鼻・内法長押
正面桁行の木鼻は象鼻形状で、頂部に巻斗をのせて連三斗組物を構成する。柱頂や木鼻・組物は赤味がかっており、内法長押隅の八双金具欠失部分も同様に、本来は拭き漆仕上げされていたようである。



1 3. 日枝神社本殿 身舎正側面切目長押
切目長押の隅の金具は、本来の形状でなく、間に合わせ的に補足している。



1 4. 日枝神社本殿 身舎床面（扉と小脇板とのおさまり）
柱・扉・小脇板・半長押などは櫨材で拭き漆仕上げしているようである。一方、壁板はスギ（天井板も杉）、床板と壇框は檜で、いずれも素木である。



1 5. 日枝神社本殿 身舎側面後端の脇障子
脇障子上部は竹の節と吹き寄せ襷による欄間を設け、外側の竹の節は部材頂を延ばして背面軒桁を支承する。脇障子板は櫨材一枚板に透かし彫り彫刻を施す。



16. 日枝神社本殿 身舎背面

背面にも内法長押・切目長押を回し、木鼻や臺股も備える。柱は切目長押以下を八角加工のままとする。また、背面腰板が欠失しているほか、土台にも傷みが認められる。



17. 日枝神社本殿 床下（身舎背面から正面をみる）

身舎正面柱も床下部分は円形仕上げせず八角加工にとどめる。足固貫の腐朽により床板が一部下がつているが、屋内床板はこの上に重ねて施工しているので屋内からは気づかない。



18. 日枝神社本殿 身舎背面木鼻および組物1
身舎柱上の組物は絵様実肘木付の連三斗形式で、庇柱上組物と同じ形式である。桁行の木鼻は、正面側と同じ象鼻形状である。



19. 日枝神社本殿 身舎背面木鼻および組物2
背面梁行の木鼻はトリカブト形式で、絵様実肘木の形状も異なる。



22. 日枝神社本殿 身舎背面軒 (柱間)

身舎桁行柱間は 3.33 尺で、垂木割は 18 枝(1 枝 1.85 寸)である。軒桁・垂木・化粧裏板・裏甲は杉、木負・茅負は樺を用い、樺材は拭き漆仕上げ、杉材は垂木を拭き漆・裏甲を墨塗りするが他は素木である。



23. 日枝神社本殿 身舎背面軒 (けらば)

けらばの出は 9 枝半を破風位置とする。また、軒桁の反りが大きいことがわかる。



2 4. 日枝神社本殿 身舎妻組

身舎組物は連三斗で、中備は絵様実肘木付の墓股を配し、虹梁大瓶束(タイヅカ)の架構を支承する。大瓶束両脇には大振りな笈形(ウガタ)を備え、大瓶束上は壁付に花肘木を備えた三斗を組んで実肘木を重ねて棟木を受ける。



2 6. 日枝神社本殿 身舎妻組上方の化粧棟木見上げ

大瓶束上の組物が棟木を受け、棟木が破風板押みを受け、懸魚を備えている様子がわかる。



27. 日枝神社本殿 屋根大棟

屋根はこけら葺きで、大棟は品軒上に木製の箱棟を設け、両端に鰭付の鬼板を配し、棟全体に樋棟を掲げる。箱棟正面の胴部分は、中央に法輪と剣、両脇に竹笹紋の飾り板を付す。



28. 日枝神社本殿 屋根軒付拝みおよび大棟鬼板

鬼板の見付中央にも竹笹紋を付す。破風軒付は一重で、裏甲上に裏板でなく蛇腹板を施す点は丁寧な施工である。



29. 日枝神社本殿 破風板舂みと懸魚

破風舂みは入八双金具痕跡が残るが、現在失われている。金具取付面は拭き漆面がよく残る。舂み懸魚は鰭付の猪目懸魚風とするが、猪目は施さない。懸魚中央上部は菊座作り出しの六葉彫刻を樽の口で止める。



30. 日枝神社本殿 破風板と懸魚

破風板腰部は卍金具痕が残る、降り懸魚は鰭のない形式で、舂み懸魚と菊座形式が異なる。



3 1. 日枝神社本殿 正面破風板と兎の毛通し
庇軒桁部の懸魚は「兎の毛通し」形式とする。その上方に痕跡を有する破風板飾り金具は、宝輪と剣をモチーフとした形式（大棟の棟飾り類似）と考えられる。



3 2. 日枝神社本殿 背面破風板尻と軒付詳細
破風板尻は猪目付の金具痕がある。



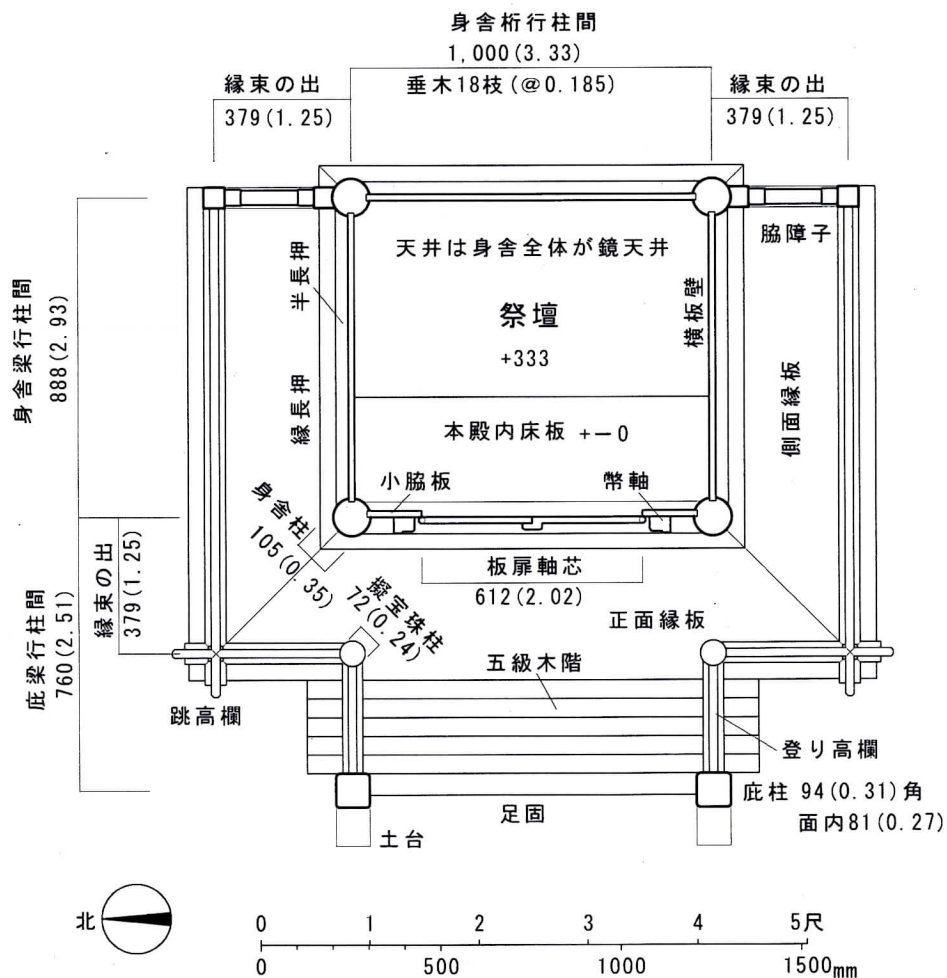
3 3 日枝神社本殿 身舎正面墓股
材種は櫟を用い、脚内彫刻は牡丹で、彩色痕跡が残る（地は拭き漆）。



3 4. 日枝神社本殿 身舎背面墓股
材種は櫟を用い、脚内彫刻は鳳凰で、彩色はなく周囲の櫟材同様に拭き漆仕上げとする。



3 5. 日枝神社本殿覆屋銘
「日枝神社々殿／建設費寄付／一金六拾五万円也／熊野神社／建築工事費／金六拾五万円也／昭和四六年三月」とあり、現在の覆屋は、昭和 46 年に熊野神社の寄付により建築されたことがわかる。



町田市鶴間所在 日枝神社本殿平面図

実測作図：大野敏 単位は実測寸法mm（尺換算値）